
現実世界モンスターティマー

ボナンザ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現実世界モンスターティマー

【Nコード】

N2908BA

【作者名】

ボナンザ

【あらすじ】

ある日突然現れた小さな子。その子は異世界の獣人だった。地求人初のモンスターティマー、海野遊うみのゆうが行く異世界ファンタジー探検記と地球で織り成す異文化交流学園物語。「おい、馬鹿。学校には付いてくるなって言っただろ（鞆に向かつて小声で）」「お、王女様！？ 何でこの学校に！？」を地で行く作品。

01話 初めての召喚？

海野 遊（ゆう）にとっては、その日は別に特別な日というわけではなかった。

いつものように学校を終わらせ、部活をやってる健全野郎やデートをするリア充野郎を尻目に、自宅に帰っただけである。

本屋によって週刊漫画雑誌を買い、両親のいない一軒家に戻ると、そのままPCのスイッチとゲームのスイッチを入れて、暇をつぶす。腹が減ったらスーパーに行って、弁当や惣菜を買って食べる。宿題を終わらせ、買ってきた漫画雑誌を読みながら眠る。

そんなありきたりの一日だった。

断言しよう。

変な行動などしていないと誓えるし、夢遊病と診断された覚えもない。

しかし何故かこんな事になっていた。

遊が目覚ましたら、目の前にはすやすやと眠る子どもがいたのである。

——現実世界モンスターティマー——

それは、一目見た感じでは、男か女かはわからないくらい中性的で幼い子どもだった。

目をつぶっていることから、瞳の色はわからないが、ぱつちりとしたくりくりなサイズだろうとまぶたから推察できる。

髪の色は淡い銀色。白、とも思えるほどの透明度。
肌の色は、プール姿が似合いそうな健康的な褐色。
しかし一つ気になることに、その子どもには頭の上からぴよこん
と、可愛らしい耳が生えていたことである。
それは遊がちよつと触つてみたら、それに反応してピクピク動く。
しかも「ふにゆう」という可愛らしい吐息のおまけ付きだ。

（えっ。なにこれ？）

遊はやつと意識をはつきりさせた。

目の前の事態に眠気が吹き飛び、頭がこんがらがる。

（あれ。えっ？ なにこの状況？ 誰、この子？ コスプレ？ で
もこんな高性能な耳の道具、現実にあるの？ いや待て待て、それ
以前の問題として、何でこんな子がここにいるんだ。あつ、もしか
して泥棒か？ けど、こんな子どもだぞ？ 幼稚園児くらいにしか
見えないじゃん？ それに泥棒が添い寝なんて……）

遊は自分のほっぺを、ちよつと強めにつねってみる。すると、き
ちんと痛かった。ということは夢ではないということだ。

遊はそつと布団をあげてみた。

その子の全身像を把握してみようと思ったのだ。

しかしすぐさま、ばさりと閉じた。

そこには見てはいけないものが広がっていた。

その布団の下には、『彼女』の裸体があった。

小さな赤い未熟なつぼみに、ぽにぽにのお腹。そして股には、ぴ
つちりと閉まった一本の縦筋。

彼女は上はおるか下だって、布切れ一枚付けていない。

（何だよ……おい……）

遊は慌てて、彼女から少しでも距離を取ろうと、ベッドの端に身を寄せた。

悪いが覚えは全くない。

間違いはなかったと信じたい。

しかし、現実はそのは言っていないかった。

他人が見たら、100%アウトなこの状況。

弁明の余地などまるでない。

（警察……呼んで大丈夫か？）

相手が小さな子どもということが幸いして、身の危険はまるで感じない。

だから遊には思考する時間があった。

（いや……警察に電話しても、俺が犯人扱いされたりすんじゃない？
この状況だと）

司法をそこまで信じていいものか、遊には判断がつかなかった。

明日の朝刊に——変態高校生、幼女誘拐してコスプレ猥褻。なんて載る可能性は否定できない。

しかし、他に方法がないのも事実だった。

窓から入り込む朝日は、すでに結構な明るさになっている。

そうつと起こさず抱っこして、外に放り出すにしても、目撃されるリスクは高い。

かといってこのままグズグズ考えていても、彼女が目覚めせば終わりである。

明確に測れない残された時間の中で、遊は懸命に考える。
そして一つの考えに行き着いた。

(よし。見なかったふりをして、学校に行こう)

それは全てを放り出すアイデアだった。

帰ってくれば、この子もいなくなっていると、思ったのだ。

万が一残っていたとしても、朝一１１０番よりははるかにマシである。一夜を共にしたわけではないという意味でだ。

すると丁度その時、ジリリリリリッという甲高い機械音が、部屋の中を突き抜ける。

遊には見なくても理解できた。

それは６：３０を示す時計の音だ。

遊は慌てて手を伸ばすが、それはすでに後の祭り。

「うーん……」

目の前の子どもがごそごそ動いたかと思うと、目を擦り欠伸をした。

遊はひいっと息を呑む。

終わった。と本気で心から思った。

目の前の子どもは、うつすらと開けた瞳で遊を見つめる。

そして小さく可愛らしい声で、言った。

「あつ。ご主人しゃま……」

遊は恐怖と驚愕の入り混じった顔でその子を見た。

喉の奥から「へっ？」という、何とも情けない声が勝手に出た。

01話 初めての召喚？

「ご主人様……って俺が？」

「あい？ そうでしゅけど？」

子どもは布団にくるまったまま、不思議そうに遊を見る。

「いや、えつと……ごめん。いつ俺がご主人様になったの？ って
か君、誰？ どこの子？」

「えっ？ あっち？ あっちはヨンガヨンガ族のパリイでしゅけど
？ 昨日ご主人しゃまがあっちを喚んで下さったんじゃあ、ありませんか」

するとパリイは「あっ」と呟いた。

どうやら何かに気づいたようだ。

「そ、そういえばそうでしゅた。昨日喚ばれたのはいいでしゅけど、
ご主人しゃまが眠っていたから、起こすのもまずいかなと思ったん
でした」

パリイはあわあわと慌て、すぐさまベッドから飛び降りると、床
の上にぺたんと座ってお辞儀をする。

「ヨンガヨンガ族のパリイでしゅ。召喚してもらって嬉しいでしゅ。
精一杯頑張りました」

丁寧な挨拶だった。

しかし遊はそれに反応することができなかった。日の光の下、全

身が頭になったパリののとある一部分に、目が釘付けになってしまったのである。

パリのお尻から突き出た一本の大きく逞しい尻尾が、空気に揺れるようにふりふりと動いていた。

それは目を擦り、見直してみても、変わらない。

銀狐のようなたくましい尻尾だ。

しかもよく見ると、パリの手の先足の先には共にふさふさの体毛が生えていた。

爪も太く、長い。

（コスプレ、にしちゃあやっぱ出来が良すぎだろ）

ピコピコ動く耳もそうだし、何よりあれほど自然に動く尻尾の軌道。

相当な金がかかっているとは思えない。

しかもこの集大成を、こんな凡人に見せて何の得があるというのか。

遊は本当にパリが召喚された獣人なんじゃないかという錯覚に陥る。

あり得ないことだが、そっちの方がしっくりくるような気がしたのだ。

するとその時、グルルルという、低く唸るような重低音が部屋に響く。

音の出所は、パリの腹部からだ。

パリはぺたりとうつ伏せた。

「あつ、ご主人さま。お腹が空いたでし」

懇願するように、床から上目づかいで遊を見る。

遊は頭をぶんぶん振って、立ち上がる。

「えっと。ひとまず、これを着てくれるかな」

遊はタンスから、小さめのＴシャツを取り出すと、パリイに向かって放り投げた。

パリイは相変わらず裸である。

四肢の先端は毛で隠れているが、重要な部分はまるっきりの無防備だ。

「えっと、これってどうしゅればいいんでしゅか？」

パリイがＴシャツをぐにぐにと伸ばしながら問いかけた。

遊はパリイに万歳するように促し、そして頭から服を着せてあげる。

「おおっ！ しゅごいっ！ 軽くてスベスベでしゅっ！」

そうして立ち上がったパリイの姿は、Ｔシャツなのにワンピース姿であった。

遊の腰までしか身長がないから当然だ。

しかも下着は無装着。

トランクスを貸すべきかとも思ったが、履かしてもずり落ちるだけだと判断し、遊はそのままタンスを閉じる。

「えっと、ご飯だっけ？」

「はいでしゅっ！」

「じゃあ、下で食べよっか」

警察に電話するのは、一旦保留にしようと遊は考えた。

遊の後ろを、まるでカルガモの子どものように、パリイはニコニ

コ笑顔で着いてきた。

01話 初めての召喚？

階段を降りてダイニングに出ると、パリイはキョロキョロと忙しなく辺りを見回していた。

見るものどれも目新しいようで、感嘆の声を上げだした。

遊が電気をつけると、びっくりしたのかその場でビクツと飛び跳ねる。

まるで原始人のような反応だ。

「ひ、光魔法でしか？」

魔法、という単語が気にかかったが、遊はひとまずスルーする。

「電気だよ。このスイッチを押せば誰でも付けられるんだ」

遊は何度かスイッチを押して、電気を点滅させてみる。

するとパリイは目をキラキラさせながら遊に近寄り、後についてボタンを押す。

それに反応して、蛍光灯がぱちりと光る。

「おおおっ！」

パリイは何度も繰り返す。

スイッチは少し高いところにあるので、ぴょんぴょんと跳ねながら。

蛍光灯の点滅に合わせてTシャツの下の尻尾が揺れる。

楽しくてしかたないと全身が表現していた。

遊はがちゃりと冷蔵庫を開けた。

そしてビニール袋に包まれた、食パンを取り出した。

遊の好みとしてはご飯なのだが、朝から炊くのは面倒で、毎日パンを食べている。

超芳醇の5枚切りはお気に入りだ。

するとパリイが駆け寄ってきた。

「なんでしか、今度は!？」

パリイは遊の下から冷蔵庫を覗き込むように入り込むと、すぐさま自分の鼻を押さえた。

「うわっ、しゅごい臭いでしっ」

見た目通り嗅覚が発達しているのか、冷蔵庫内の臭いはいささか強烈だったようだ。

「冷蔵庫、って言ってな、この中にご飯になるものを保存してるんだよ」

「おおっ、なるほど。確かにすっごくひんやりしてるでし。ということは、氷魔法の一種でしか？」

「いや、魔法じゃなくて、これもさっきの光るやつと一緒に電気の力」

「へえ! これもデンキでしか! やるでしね。そのデンキってやつは」

「あっ、そうだ。パリイちゃんはこれ食べれる?」

遊はパンを一枚取り出して、パリイに手渡しす。

パリイは興味深そうに眺めた後、匂いを嗅ぎ、ぱくついた。

「うん! おいしいでし!」

パリイはもにもにと食べながらしゃべる。

「あつ。焼かなくてよかった?」

「んぐつ? 焼く?」

「うん。ちよつと焦げ目が付くぐらいだけだね。俺はそうしていつも食べてるから」

「そうなんですか? じゃあご主人しゃまと一緒に、焼いてほしいでし」

「オツケ」

遊はオーブントースターに2枚のパンを入れ、つまみを回す。
ブウウンという始動音が、部屋に響く。

パリイこれまた興味深そうに、オーブントースターを見つめ出した。

「熱を持って危ないから、触らないようにね」

「あいつ。わかったでし」

遊は元気よく返事をするパリイを見届けると、冷蔵庫の中から牛乳を取り出し、マグカップ2つに注ぐ。

冷たいままでも良かったが、温かいほうが元気がでると思い、電子レンジに入れることにした。

ついでにマーガリンとイチゴジャムを取り出し、食卓に並べる。
後は待つばかりになる。

遊は椅子に座り、パリイを見た。

「ねえパリイちゃん。君のお家ってどこになるの?」
「キザントっていう町でし」

パリーはオーブントースターを眺めながら言った。

遊には聞いたことのない名前だった。

しかもすんなりと出た名前だった。

思いついた架空のものだとするなら、多少はたじろぐのが普通である。事前によほど設定を練っていたのか、それとも本当に召喚してしまったのか。

遊はさらに尋ねてみる。

「お父さんやお母さんは？」

「とーちゃんは別のご主人の使い魔でし。かーちゃんは家でいろいろでし」

「いろいろ？　って主婦ってこと？」

「うーん。そのシユフってのがよくわからないでし。ご飯作ったり、洗濯したり、服を縫ったり、のいろいろなんですしが……」

「あつ、じゃあ主婦ってことで一応いいと思うよ。ふーん。そうなんだ。えっと、じゃあさ、もう一つ聞くんだけど、お父さんやお母さんも、普段からパリーちゃんみたいな獣人の姿してるの？」

「あい？　獣人？　あ……うーんと、お父ちゃんはヨンガヨンガ族でしけど、かーちゃんはミルミル族でしから……えっとでしね、たぶんご主人しゃまの言う、獣人にはなると思うでし。あつ、でも、あつちらから見るとあつちらが普通で、ご主人しゃまがヒューマンタイプってことになるでしよ？」

「あつ、そうか。なるほどね。ごめんごめん、そりゃそうだ」

視点が違えば価値観も変わる。

パリーは獣人と呼称されるのが嫌なようだった。

「でしから、できたら獣人じゃなくて、ヨンガヨンガ族って言うて欲しいでし」

「はい。ヨンガヨンガ族だね。ごめん。次からきちんと呼ぶよ」

「あいゝ」

パリイはにこりと笑った。

それを見た遊は気づく。

今まで微妙な薄暗さでわからなかったが、パリイの上顎犬歯は、両対ともまさに牙とも言うべき長さであった。

八重歯などではない。まさに犬のそれである。

つけ歯とも考えられるが、本物の牙だと遊は思った。

人に話せば一笑に付される考えかもしれないが、年齢から考えられる受け答えの隙のなさ、牙や爪よ体毛のできを考えると、そっちの方がしっくりくる。

そうあって欲しいという願望も、その考えを後押ししている。するとその時、ピッピッピという電子音がなった。

それはレンジによる牛乳の加熱が終わった合図であった。

「あう。この音ってなんでしか!？」

聞いたことのないだろう奇妙な音に、パリイは耳に手をあて探ろうと澄ました。

しかしパリイの耳は、側頭部にある通常の耳介部の一段上に存在する。

そしてこの時、パリイはすぐさまその場所に手を当てた。

咄嗟の反応にしては慣れすぎていた。

遊は驚き、立ち上がった。

そしてきょとんと見つめるパリイの髪を、優しくかき分け耳の場所を観察した。

そこには、皮膚があつた。穴はおろか、それを塞いだ跡もない。

遊はパリイが人間ではないと、確信した。

01話 初めての召喚？

「ご主人しゃま？」

パリイは不思議そうに遊を見た。

遊はその手をゆっくりと下ろす。

「パリイちゃんって牛乳は好き？」

遊はレンジからホットミルクを取り出し、取っ手の方を持ちやすいように反転してパリイに渡す。

受け取ったパリイは鼻を寄せ、くんくんと嗅ぐ。

そして笑う。

「あつ、この匂いっておっぱいでしね！ だったらあっちは大好きでしょ！」

「よかった。じゃあ、熱いから気をつけてね」

遊はもう片方のホットミルクを取り出して、椅子に座る。

そして、熱いのかカップに口をつけてちまちまと啜るパリイを見て、微笑んだ。

パリイの存在が、一番可能性の高かったコスプレではない。となると、新種の生物か人造兵器か宇宙人か、もしくは異世界からの来訪者と考えられる。

これはもうどれを選んでも、非日常の入り口である。どの選択肢でも、大差はない。

映画の様な、漫画の様な、小説の様な、そんなお伽話のプロローグに似た出会いに、遊の胸は高鳴りを覚えたのだった。

01話 初めての召喚？（後書き）

さすがに500文字は………すみません
後でここまですを1話としてまとめるつもりなんで、大目に見て下さ
い

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2908ba/>

現実世界モンスターテイマー

2012年1月10日12時54分発行